

仏教徒の願いは、人類の普遍的理想たる仏を求め、仏と成ることを実践することである。しかし、現実世界にあって我々人間は、悟りの境地が絶対寂靜のものとする釈尊の教法を理想化し、単に頭で理解し、現実を否定した虚無の境地に近いものと捉えがちである。

我々人間のものの見方は、知らないうちに与えられた環境や習慣に影響・制約されて先入観や偏見がそこに生じ、我々凡夫の避けられない現実的なものの見方を、時間・世間の変遷にかかわらず、恒常的に生み出しているといえよう。

釈尊はこの現実気付かず迷いを生じさせる原因を、自己の既得の意識に固執する「我見」であると説いている。法華經はこの自我を滅却した者には仏の実相世界が開かれると説いており、言い換えれば、仏の実相は既成の観念ではとらえられるものではなく、むしろ既成観念を徹底的に否定していくところにその実相を見ることができるとしているのである。

仏教は智慧を持ってその拠り所とするが、この智慧が如何なるものであるのかは根本的に極めて難しい問題である。相対的認識としての理性や知性とは区別され、究極の真理を認識する絶対的理性・知性こそが仏教の説く智慧であるとも言えよう。

大乘仏教では「一切衆生悉有仏性」が説かれ、人間はだれでも成仏できる資質を有しているとしている。法華經はこの概念を強調した経典であり、仏とは「人間の最高の理想的姿」、「人類が永遠に願い目指す目標」であることを説いている。仏を求めるとは、見方を変えれば現実を肯定する人格形成活動であり、これは人間個人の目標であると同時に、より良き人間世界を構築するための大きな目標ともいえよう。法華經ではこの人間個々の崇高・理想たる人格形成活動とともに、他人をより良い人間へと導く教化・実践に励む菩薩の思想がより強調されている。

さらに、法華經では仏の世界は「即是道場」いわゆる人間が生活を営む娑婆の現実世界こそが仏に近づく修行の場所であり、この現実世界にあってこそ仏になることができると説いている。

いふならば、法華經は人間の理想像としての仏とそれを実現させようとする菩薩あるには衆生との関係を、多方面から分析・描写した経典といえ、多種多様な人間の気根に応じて対機説法たる三周説法等の手法を用い、人間が陥りやすい高慢さの否定、正しい真理の見方、三乗方便一乘眞実が明記されているのである。

本発表は、これらの視点に立ち法華經の普門示現の思想に見る人間観を考察するものである。